

21世紀の道徳 学問、功利主義、ジェンダー、幸福を考える

ベンジャミン・クリッター著

評・森本 あんり (神学者
国際基督教大学教授)

翻訳本ではなく、日本語で綴られたブ
ログを元にした和書である。著者は京都
生まれのアメリカ人。だから扱われてい
る問題も「文系学問批判」や「相対的貧

歪んだ倫理感覚を挑発



晶文社
1980円

ンクな結論が導き出されるが、道徳論で
は「権利」を根拠にすべきでないことが
その過程で説明される。権利は対立する
からだ。その対立を調整するのが、メタ
道徳としての功利主義である。

他方、常識的なのに挑戦的に聞こえる

のは、「ロマンティック・
ラブ」や「愛のあるセック
ス」論だろう。昨今はLG
BTQ (性的少数者) やセクハラや売買
春は論じられるが、ヘテロの恋愛やセッ
クスの倫理についてはほとんど論じられ
ない。というより、「ふつうの」などと
書いた途端に「異性愛中心主義」という
批判が飛んでくる。

だが著者は、現代のジェンダー論が生
物学的事実を頑なに無視し続けている
ことに異を唱える。恋愛は、近代西洋
が「発明」した感情ではない。心理学や
脳科学の知見をすべて社会的に構成され
た性差として切り捨てるのは、本質主義
と同じくらいドグマチックである。

著者は、今日の倫理的磁場に強い偏差
を与えているポリティカル・コレクトネ
スにも注意を怠らない。民主主義や人権
思想の根拠を問い直し、返す刀で左派の
繰り返す脊髄反射的な権力批判にも斬り
込みを入れる。ポンコツ化した自分の道
徳的コンパスを総点検したくなる本だ。

人間と動物と植物の間に「種差別」を
認めない動物倫理からは、ややシヨッキ

◇ Benjamin Critzer = 1966年、
京都府生まれ。批評家。ブログ「道徳的動物
日記」を開設している。